様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２７ 年　 ６ 月 １１ 日現在

機関番号：３４５０４
研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2011～2014
課題番号：２３５２０４１１

研究課題名（和文）グリム兄弟におけるドイツ・ロマン派の連続性と変容―イメージとテクストの協働

研究課題名（英文）Continuity and difference of German Romanticism in the works of the Brothers Grimm -- interaction of image and text

研究代表者
村山　功光（MURAYAMA, Isamitsu）

関西学院大学・文学部・教授

研究者番号：２０４６００１６

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,900,000円

研究成果の概要（和文）：グリム兄弟の文学観（民衆の伝承には古代の記憶が残存）、人間観（古代人・民衆・子どもは人類史的・個人史的に〈幼年期〉）、宗教観（神に導かれた無自覚的な文学創造）の独自性を、18世紀後半の疾風怒濤、18世紀末の初期ロマン派の思想の圏内で追究した。特に兄弟の思想を〈近代人的分裂〉解消の処方箋の一つと捉え、〈自然〉憧憬がどのような視覚的〈イメージ〉によって醸成され、また思考が新たな〈イメージ〉を喚起するのかを研究した。ゲーテの形態学の植物、ヘルダーの〈民衆ポエジー〉、画家ルンゲの〈新しい風景画〉の子ども・植物・大宇宙のモチーフとアラベスク手法との関係から、兄弟独自の〈自然ポエジーの風景〉を解明した。

研究成果の概要（英文）：In this research I examined the thoughts of the Brothers Grimm in the wider context of the ‘Sturm und Drang’ and the ‘Early Romanticism’. I regard their motivation to collect folktales as a search for remedy to cure the inner disunity of modern mankind. From this point of view I specified what kind of images express the longing for ‘nature’ and the new ideas respectively. I concentrated my attention on several crucial images like the descriptions of the plants in J. W. Goethes ‘morphology’, the folk in the ‘Volkspoesie’ of J. G. Herder and the new concept of painting by P. O. Runge who took motifs like children, plants, universe and created a ‘new landscape’ of the nature by using an ‘arabesque composition’. In this way I shed new light on the iconic concept of the ‘landscape of the Naturpoesie’ by the Brothers Grimm.

研究分野：人文学

キーワード：グリム兄弟　ルンゲ　ロマン主義　イメージ論　ヘルダー　自然観　ポエジー

１．研究開始当初の背景

（１）従来の研究では、グリム兄弟は一心同体とみなされ、区分・分析されてこなかったが、報告者は博士論文 Poesie – Natur – Kinder. Die Brüder Grimm und ihre Idee einer ‚natürlichen Bildung‘ in den „Kinder- und Hausmärchen“（2005 出版）で兄弟の文学観をそれぞれ 4 つの思考モデルで分析した。つまり、古代から近代への移行を下降と捉えるか否かという歴史哲学、また古い時代や外国の文学の受容方法についての解釈学的視点における兄弟間の相違を明らかにした。そして、この相違を内包しつつ兄弟が『グリム童話集』などの初期の著作を共同で執筆していた状況を、〈近代人の分裂意識〉の克服を目指す〈自然的自己形成〉の実現の模索として捉えるに至った。

（２）この到達点に立ち、さらに兄弟の文学観の理解を深めようと考えた。この点については、特に〈民衆ポエジー（Volkspoesie）〉概念をめぐって兄弟が影響を受けた詩人・思想家との関係からのアプローチ（ヘルダーを先駆者と捉え、A. アルニムと C. ブレンターノがこれを継承し、グリム兄弟に直接影響を与えたとされる）はすでに行われてはいた。しかし、この種の先行研究は、①グリム兄弟の志向性の相違を考慮していない、②ヘルダーからグリム兄弟にいたるまで詩人・思想家によって共有された〈民衆ポエジー〉、〈自然ポエジー〉、〈国民ポエジー〉の概念が同一の意味内容を持つという前提に立っている、③概念のみを扱っているためその具体的な意味の多様性を考慮していない、などの点で不十分だと思われた。

（３）報告者は〈視覚的イメージが思考に及ぼした影響〉に着目して、新たな地平を開こうと試みた。グリム兄弟やロマン派の人びとのテクストには、（特に人為的不幸状況の対極として）〈自然〉の描写が非常に多く、自然メタファーが喚起する〈雰囲気〉の重要性は極めて大きい。報告者は『グリム童話集』を客観的に蒐集された昔話集とはみなさず、1800 年期に、ナポレオンによる支配下のドイツで、グリム兄弟という若い男性の文献学者たちが編集した〈作品〉と捉えている。兄弟が〈ドイツの文学遺産を集め、疎外・故郷喪失感に苛まれる近代人に「本来的な」自然なあり方を提示しよう〉という願望にそって、どのようなイメージ（図像）を選択しそれに導かれて思考していたかを知ることにより、〈民衆ポエジー〉概念の内容が具体的・立体的に理解できると考えられる。

（４）この分野に関しては先行研究がほとんどなく、絵画やイメージを読み解くイコノロジーや美術史の文献から手法上の示唆を得た。また、汎神論的自然観、人間の〈内なる自然〉をめぐる 18 世紀の言説、1800 年期における子ども・民衆・女性についての考え方の変化、自然科学の新しい知見をも考慮に入れる必要が生じた。

２．研究の目的

（１）グリム兄弟が民間伝承などのいわゆる〈自然ポエジー（Naturpoesie）〉（これは〈民衆ポエジー（Volkspoesie）〉、〈国民ポエジー（Nationalpoesie）〉とほぼ同義的に使用される概念）を論じる際には、植物、四季、天候、泉などの〈自然〉のメタファーが満ち溢れている。さらに、伝承を口承で昔から語り伝える〈民衆〉も、自然の中で生活し都市文化や支配層の教養に毒されていない〈自然〉な存在として、〈自然〉グループの中に配置されている。また、伝承の内容をなす小人や精霊などの超自然的存在、アニミズム的思考、信仰による奇蹟なども、この文学の描写のための〈自然〉の一部をなしている。これらのイメージはグリム兄弟により選択され、独自の意味付けがなされ、ある統一的な〈イメージ群〉へと編集されている。兄弟の思考に密接に結びついているイメージにはどのようなものがあるか、そのさまざまな由来と意味・連想射程を明らかにする。

（２）兄弟は〈自然〉をめぐるさまざまなイメージを念頭に置き、それらが次々に喚起するイメージに乗って文学観を展開している。ここには、イメージが思考に契機と養分を与える一方で、新たに言語化されて明確になった思考が、さらに新たなイメージを喚起するという相互作用が見られる。〈民衆〉、〈子ども〉、〈女性〉、〈国民性〉などがさまざまなイメージによって媒介されて〈自然〉へと統合されていく状況を分析し、兄弟の思想の性格を解明する。

（３）兄弟による古いドイツ文学や口頭伝承への関心は、通例考えられているような現実逃避的過去回帰願望あるいは純学術的敬虔心に由来するのではなく、近代批判的現状改革意識に発している。〈近代人の分裂意識〉、悟性偏重による全体性の喪失、ドイツ文化の根無し草的性格などが克服されるべき悪徳と考えられ、そのために芸術（特に民間伝承）の力が動員される。それは理知主義が切り捨ててきた別原理の表現方法、例えば謎めいていて多義的なメッセージを同時に発する〈ヒエログリフ（象形文字）〉、また自由に運動して一見無関係なもの同士をゆるやかに結び付けつつ大きな文脈へと統合する〈アラベスク〉などを用いていると考えられる。この点を解明することで、グリム兄弟の文学観がモチーフにおいても方法においても、初期ロマン派の思想の圏内にあることを確認すると同時に、グリム兄弟の独自性・限界をも明ら

かにする。

（４）イメージと思考の協働は、グリム兄弟の思考の解明に限らず、普遍的なテーマである。グリム兄弟およびロマン派の思考・芸術にとって重要であった〈自然〉の視覚的イメージを中心に研究することで、イメージと思考（テクスト）の相互作用を広く考える契機としたい。ヨーロッパではキリスト教の伝統やルネサンス以降の図像学の伝統があるが、近代以降の図像とテクストの新しい関係を考える際にも、この相互作用の視点は有用だと思われる。

３．研究の方法

（１）従来は思想の研究といえば、時間的に前後に位置する思想家との影響関係をテクストに即して明らかにすることが主流だった。グリム兄弟に関して言えば、ケルトの叙事詩と考えられた「オシアン」やイギリスの古い歌謡に触発されたヘルダーが〈民衆ポエジー〉および〈民謡（Volkslied)〉という概念を作り、その影響下にロマン派のアルニムとブレンターノが民謡集『魔法の角笛』を編集し、この二人から民間伝承蒐集の依頼を受けたグリム兄弟が『グリム童話集』を出版したというのが定説である（『ドイツ民衆本』の編者 J. ゲレスや兄弟の大学での教師で法学者 F. C. v. サヴィニーも考慮されることがある)。それに対して報告者の方法論的立場は、文化学的に言えば〈イメージ論的転換〉の線上にある。グリム兄弟はどのようなイメージを取捨選択しそれに導かれて、どのような思考を形成しようとしたのか、また自分で作り上げたイメージ群に取り込まれて思考が規定されてはいないかが問題となるのである。

（２）兄弟による〈自然ポエジー〉概念にとって重要な要素は、①ポエジーは人々の間で集合的・匿名でいわば〈自然発生〉したのであり、②〈自然〉の中で生活してきた〈民衆〉がポエジーを太古から持続的に伝承の担い手となり、③こういう言語文化は〈国民〉全体の〈自然な〉共有財である、という考えである。これらに養分を与えたイメージを探るならば、18 世紀後半の（風景や庭園に見られる）自然観の転換、1800 年期の生物学を始めとする自然科学、ゲルマン・ドイツを強調するナショナリズム、汎神論的自然観、文化の担い手としての新たに評価された〈民衆〉、民族誌に基づく〈高貴な未開人〉の理想、再発見された『ニーベルンゲンの歌』や北欧神話、ロマン派により再評価されたドイツ中世、J. ベーメの神秘主義、価値転換した〈幼年期（子ども)〉、啓蒙主義的自然法思想、諸民族の創世神話、西洋におけるシンボルの伝統など、さまざまな分野の表象に目配せする必要がある。

（３）グリム兄弟による植物メタファーと当時の新しい生物観を代表する J. W. ゲーテの形態学との親縁性を探った。J. G. ヘルダーの〈民衆ポエジー（Volkspoesie)〉が提示した〈民衆〉の諸性質のイメージを考察した。さらに、画家 P. O. ルンゲが構想した、子どもや植物、四季、女性などを描き込んでその背後に神の作用を感じさせる〈新しい風景画〉と、グリム兄弟の〈自然ポエジーの風景描写〉とのモチーフ上および手法上の親近性を明らかにした。

（４）ルンゲの絵画を分析するため、ルンゲ作品集および Verwandlung der Welt. Die romantische Arabeske（『世界の変容 ― ロマン派のアラベスク』、2013）などの画集、および美術史・芸術学の論文を読み、図像分析・解釈の基礎固めをした。図像解釈をテクスト解釈とどのように結び付けて説得力を表現できるかは、美術史を専門としない報告者にとって、難題ではあったが、文学研究からは知りえなかった新たな知見をもたらしてくれた。

（５）グリム兄弟は、将来画家になる末弟ルートヴィヒ・エーミールとともに、ブレンターノと一緒に、文学作品（『少年の魔法の角笛』）の表題版画の作成にも携わっていた。そのブレンターノは、ルンゲに自作バラードに付す挿絵を要請していたし、自分でもルンゲを模倣して作画している。ヴィルヘルム・グリムはルートヴィヒ・エーミールに自著『古デンマークの英雄歌、バラード、メールヒェン』に表題版画を、当時ゲーテの推奨により有名であったデューラーの版画複製を参考にして作成させていた。このように、文学作品とイメージの相互作用はグリム兄弟にとって自明であった。このような、グリム兄弟を取り巻く当時の美術状況も、十分に調査する。

４．研究成果

（１）ゲーテの形態学は、それ以前のリンネなどによる〈分類学〉的植物観から離れて植物を変化の相で捉えているが、その有機的変化がグリム兄弟にとっては文学の歴史的変遷に重ねられている。ゲーテがすべての植物の元である〈原植物〉を想定したように、ヤーコプが歴史の始原に〈原ポエジー〉とでもいうべきものを構想していること、またヴィルヘルムが古代文学の現代における受容方法を有機的・内発的展開における変容として賛同することにも、ゲーテの植物観が比喩を提供しているのである。グリム兄弟の学問的姿勢は、根源あるいは時間における変化を問う〈歴史的〉性格がきわめて強く、この点で 19 世紀の学問の（特に人文諸学における）パ

ラダイムを代表する典型的な例である。新しい生物観が人文科学の比喩に用いられることは、それが 19 世紀後半には社会科学の比喩としても適用されて社会ダーウィニズムに発展することとも無縁ではない。〈自然メタファー〉は、歴史的視点に具象性を与えて豊かにした反面、土着的で〈有機的な発展〉以外の可能性を無視してしまう暴力性も内包している。

（２）ヘルダーが〈民衆ポエジー〉概念を初めて用い、後のロマン派に影響を及ぼしたことは知られている。それによって、下層の民衆文化の価値転換が起きたが、それは近代知識階級の目から見た〈近代的分裂解消のための願望〉の投影の発現であった。〈民衆〉はさまざまに表象され純朴・直情・健康などの価値が付与された。ヘルダーにとっては、同時代の形骸化した教養文化を批判するための別原理の文学美を対置することが主眼であった。しかしグリム兄弟においては、〈民衆〉は〈昔から〉風俗習慣を変えず、四季や天候に左右され〈自然〉の中で生活してきた人々、それゆえ〈古代〉と連続的につながっている存在とみなされている。それゆえ〈民衆〉は、歴史的には〈古代人〉と、また個人史的には〈幼年期（子ども）〉との親縁性が確立される。これらの存在は兄弟によって〈自然な存在〉に算入され、教養に毒されていない無自覚的で（いわば神に導かれて）善良であるという倫理的価値が与えられる。グリム兄弟において〈民衆ポエジー〉は、〈善いから美しい〉という倫理性に伴われた美の主張へと変わってきている。

（３）〈自然〉の風景の表現として、ルンゲが絵画で描いた〈新しい風景画〉とグリム兄弟が文章で表現した〈自然ポエジーの風景〉には、ある類似性が認められる。ルンゲは ― 同時代の C. D. フリードリヒとは異なり ― 外界の自然の写生に基づく風景画ではなく、想像力により選択・構想したモチーフを綿密に構成した画面に描き込むことで〈新しい風景画〉を描いた。その中で採用されたモチーフは、子ども、植物、宇宙、四季、女性、泉およびキリスト教関連のモチーフなどである。これらはグリム兄弟による〈自然ポエジー〉描写においても共通しているが、それら神秘的（言語化は不要）で多義的な〈ヒエログリフ〉として配置され、〈アラベスク〉の手法によってゆるやかに結び付けられ展開・変容されうる表現様式の点でも類似している。〈ヒエログリフ〉と〈アラベスク〉は、F. シュレーゲルやノヴァーリスが新しい文学創作のための理論とした重要な概念でもある。グリム兄弟が〈自然ポエジー〉によって、神的なものが感じられる〈自然〉の世界を描き出し、〈近代的分裂〉を克服しようとするとき、兄弟は彼ら独自の〈新しい神話〉を提示しようとしているのであり、それゆえ ― 少なからぬ相違点を含みつつも ― 初期ロマン派の思考圏内にあることが確認できる。

（４）ルンゲの著述および絵画の分析から、『グリム童話集』の構造や戦略が明瞭になり、兄弟が〈自然ポエジー〉をある種の〈風景〉として描いていることが見えてきた。例えば、ルンゲの連作「四つの時」は〈枠画＋枠内画〉という構成をとっており、枠画では『旧約聖書』からモチーフが採用され、枠内画では朝（春）・昼（夏）・夕（秋）・夜（冬）がそれぞれ描かれている。枠画と枠内画は直接には関係がないが、間接的に参照し合う構造になっている。これは、『グリム童話集』で〈自然ポエジー〉を描く一般論の〈序文〉と、収録された個々の具体的な〈物語〉との参照関係にも通じるものがある。また、ルンゲが絵画を室内装飾として構想し、日常生活の中で作用を及ぼす応用芸術を志向していたことも、グリム兄弟が『童話集』を家庭で朗読を通じて〈自然ポエジー〉が人々に浸透する実用的な本と考えていたことと無縁ではない。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　７　件）

① 村山 功光「もう一つの〈啓蒙期の文学〉 ― 佐藤茂樹『ドイツ児童書の社会史 ― ほらばなしはいかにして啓蒙の時代を生き延びたか』」（査読なし）
『ヘルダー研究』第 21 号、2015、1―7
（印刷中）

② Isamitsu Murayama: Zur Visualisierung einer Landschaft der ‚Naturpoesie‘ – die Brüder Grimm und Philipp Otto Runges Konzept einer ‚neuen Landschaft‘. In: Claudia Brinker-von der Heyde/ Holger Ehrhardt/ Hans-Heino Ewers/ Annekatrin Inder (Hrsg.): Märchen, Mythen und Moderne: 200 Jahre „Kinder- und Hausmärchen“ der Brüder Grimm. (= MeLiS Bd. 18 Teil 1.) Frankfurt am Main u.a.: Peter Lang, 2014, 65-81　（査読あり）

③ 村山 功光「ヘルダーの〈民衆ポエジー〉の概念」、立教大学ドイツ文学研究室編『高橋輝暁先生停年退職記念文集１　日

独文化論考』（ASPEKT 別巻１）、2014、111－124
（査読なし）

④ Isamitsu Murayama: Volkspoesie als Kindheits- und Kinderliteratur. Von Herder zu den Brüdern Grimm. In: Gabriele von Glasenapp/ Ute Dettmar/ Bernd Dolle-Weinkauff (Hrsg.): Kinder- und Jugendlitaraturforschung international. Ansichten und Aussichten. Festschrift für Hans-Heino Ewers. (Kinder- und Jugendkultur, -literatur und –medien. Theorie – Geschichte – Didaktik. Bd. 93.) Frankfurt am Main u. a.: Peter Lang, 2014, 233-247（査読なし）

⑤ 村山 功光「グリム兄弟とルンゲ ―〈自然詩の風景〉の視覚的イメージ」、『人文論究』（関西学院大学人文学会）第 63 号第 1 号、2013、219-242（査読なし）

⑥ 村山 功光「『グリム童話集』200 年」、『ドイツ文学論攷』（阪神ドイツ文学会）第 54 号、2012、82-85（査読なし）

⑦ Isamitsu Murayama: Weg zu einer ‚anderen Wahrheit‘ durch die ‚epische Poesie‘. Zu einer Kulturkritik der Brüder Grimm. 『人文論究』（関西学院大学人文学会）第 61 巻、第 1 号、2011、159-170（査読なし）.

〔学会発表〕（計 １件）

① Isamitsu Murayama: Über die volkstümliche Poesie bei Herder, den Brüdern Grimm und Kunio Yanagita、日本ヘルダー学会、立教大学（東京都）、2013 年 9 月 17 日

〔図書〕（計 ０件）

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織
(1)研究代表者
村山　功光　（MURAYAMA, Isamitsu）
関西学院大学・文学部・教授
研究者番号：20460016

(2)研究分担者
（　　）

研究者番号：

(3)連携研究者
（　　）

研究者番号：